

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	東大のいれずみ標本 : 背中の「桜姫と清玄」も彫り物絡み (いれずみ物語 ; 18)
Author(s)	小野, 友道
Citation	大塚薬報 = Otsukayakuho, 629: 31-33
Issue date	2007-10-10
Type	Journal Article
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/3909">http://hdl.handle.net/2298/3909</a>
Right	



# いれずみ物語

— 18 —

小野 友道

## 東大のいれずみ標本

— 背中「桜姫と清玄」も彫り物絡み —

東大といえば、「とめてくれるな おっかさ  
ん 背中がいちょうが 泣いている 男東大ど  
こへ行く」が有名だが、ここでは、もちろん本  
物のいれずみの話である。土肥慶蔵と遠山郁三  
による『彩色皮膚病圖譜』（1931）に、彫り物  
をした皮膚の剥製標本が掲載されている。この  
標本の主は、大正8年に皮膚科を受診した77  
歳の男子で、「既往歴：壮年時代当時の職人風  
俗ニ従ツテ割青ヲ始メ時々之ヲ中絶シテ数年ヲ  
費シタリトイフ。操作ハ数本乃至数十本ノ鍼ヲ  
束ネテ毛筆状トナシ、之ニ墨汁又ハ朱ヲ浸シテ  
皮膚ヲ割刺セリ。其際皮膚ハ発赤・腫脹シ、灼  
熱及ビ疼痛ヲ覚ユルモ、大抵一週間内外ヲ経バ  
常態ニ復スルヲ常トシタリト謂ヘリ。現症：軀  
幹・四肢ニ亘ツテ広汎、緻密ナル文身アリ。背  
部ニハ桜花爛漫、紛葩ノ間ニ清玄ト桜姫トヲ配  
シ、左腕ニ綱手、右腕ニ大蛇丸ヲ施ツテ蛞蝓ト  
巨蛇トヲ點綴シテ密畫ヲ割シ彩色絢爛タリ。但  
シ地雷也ト墓竝ニ著色ハ未ダ完成スルニ至ラズ  
シテ頭部皮膚ニ癌腫ヲ獲テ歿ス。本図ハ其ノ屍  
体ヨリ採リタル皮膚ノ剥製標本ナリ」とある。  
この図柄の中心をなす「桜姫と清玄」の一部を、  
本稿「いれずみ物語」のタイトルの背景に使わ

せてもらっている。

\*

東大には百枚近くはいれずみ皮膚が秘蔵され  
ていたと、高木彬光が『刺青殺人事件』で述べて  
いるが、

「もっぱら標本蒐集の任にあたつたF博士  
は、十数年というあいだ一日もかかさず何軒か  
の銭湯を巡歴した。やくざ、香具師、鳶職、そ  
の他刺青がありそうな稼業の人々のあいだを、  
それからそれへと伝手を求めて歴訪した。…そ  
のような努力の末に、ある傑作を探りあてたと  
しても、それだけで問題は解決しない。第二に  
横たわる難関は、刺青譲渡の契約である…どん  
なに生活が困っていても、まさか背中に彫った  
刺青の皮をはいで、衣食の資にあてようという  
酔狂の人間がいるはずはない。結局、その家  
にお百度をふんで、元来迷信深いこの連中に、とく  
と理屈をかみわけてきかせ、やっとのことで、  
死後解剖と刺青譲渡の契約を結んで前金を渡す  
…そして、相手の死ぬのを待たねばならむ」

とその蒐集の難しさを語っている。

さて、皮膚科の図譜を飾った本人は、何ゆえ  
にこのいれずみを望んだのか。桜姫と清玄とは



何者かなどなど、いろいろ調べてみたくなろうというものだ。この図譜には生前の上半身裸の患者の写真も掲載されているが、77歳とは思えない筋骨なお逞しい男である。本人の皮膚科受診の理由は、この彫り物をどうこうの話ではなく、頭の皮膚癌にあった。彫り物はむしろ自慢の代物であったと推測される。そうでなかったら、皮膚を剥製とは、本人はもとより、家族も賛同しないはずである。どういういきさつで話がまとまったのか、今なら到底できないことであるが、やはり大正8年という時代を背景に、学問のために決心してくれたのか。あるいは失礼な話だが、癌の治療費の代わりになったのだろうか。

飯沢 匡の小説「コレクター」も、刺青の皮膚を蒐集している老人の話である。「本当なら自分で全身に彫りたいところですが、ご覧のようにこんな瘡せ型ですから、刺青なんて似合いません」、若い者に彫らせようと思っても、うまくいかないというわけで、「やっぱり死んだ人の皮膚でも蒐めるのが一番よいと思ったんですよ」ということになった。「死んだ人の体からはぎとるのですか?」「まさか、あなた、生きてるうちは、はぎとれませんよ」「しかしどうやって死んだ人からはぎとるんです。医者にでも頼んで置くのですか?」「おやあなた御存知ないんですか? みんな生きてるうちに予約して置くんですよ。前金を払いましてね。」「本人がいくらいいといっても遺族が承知しやしませんよ。屍体から皮をはぐなんて如何にも残酷だということです。これもよく判ります。まあ、生前、何かというと自分の刺青が自慢だった爺さんの、折角の皮を焼き場へ行行ってやいてしまうのは勿体ないといってくれた粹なつれあいの婆さんがいたので、はじめて一枚、蒐められたのですがね。それでも、あとで、親戚に皮を売ったんだらうって、大分疑われたそうです。あとの二枚はみよりのない老人を入院させて最後までみとってあげたので、そのお礼心もあって呉れたものなんです」というのである。

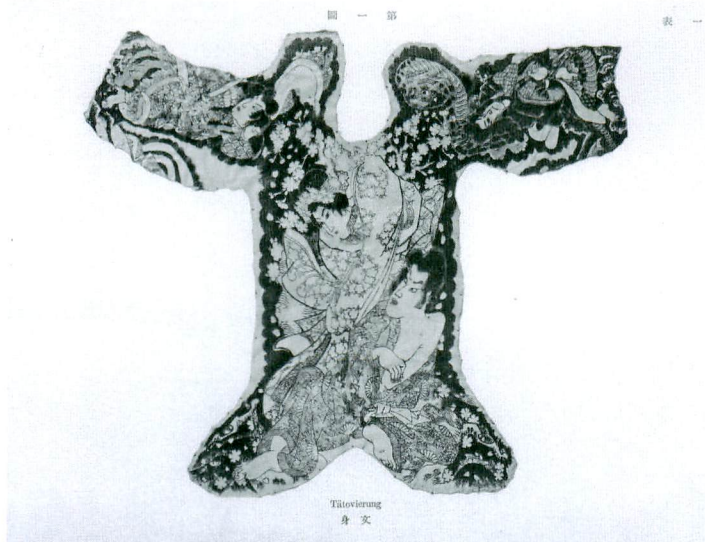
また前述の高木の『羽衣の女』にも、鉄火場で百両をすってしまった男が、自分に惚れているお小夜の背中の彫字之が彫った見事な「羽衣」を借金のかたにした。

「俺も無理にたあ言わねえが、兎や牛や馬じゃねえから、皮を売るといっても、すぐにこっちが殺されるわけじゃねえ。ただ証文に自分の名前を書いて判をおすだけでいいんだ。死んだら体を解剖して、それから皮だけはいでもらう。…だから、すぐにも手付けの金はもらえるし」

この小説の結末は、金と関係なく、惨めな女としてではなく、凄い悪女として後世に伝わることを願って、「羽衣」の皮を残して、お小夜は死ぬ。

\*

さて、「桜姫と清玄」に話を変えよう。歌舞伎狂言作者鶴屋南北の「櫻姫東文章」である。江戸文化の爛熟した文政時代、退廃的世相を映し出す南北の狂言は圧倒的な人気を博した。濡れ場、怨念、そして殺人とすさまじく、「櫻姫東文章」もまさにそうである。墓場の穴掘りである「釣鐘権助」、実は「信夫の惣太」という桜の名所「隅田川」を舞台とした浄瑠璃などで有名な悪党の手で、父と弟を殺される。そして桜姫自身も暗闇の闇で犯されてしまう。その犯人の左の腕の「桜に釣鐘」のいれずみを桜姫は覚えていた。そして、あろうことかその犯人権助を忘れられなくなった。妊娠もした。それで自分の腕にも同じ「桜に釣鐘」のいれずみである。一方、清玄は真言宗の阿闍梨であるが、所化自久という名のころ、相思相愛の稚児白菊丸と江ノ島稚児ヶ淵で投身心中する。一人生き残るが、白菊丸は桜姫に生まれ変わっていた。その桜姫に焦がれる清玄。さらに清玄と権助、実は双子の兄弟と、ややこしいこと。権助との赤子を殺してしまった桜姫は、小塚原の女郎に身を落とすが、腕の「釣鐘」が風鈴みたいで、「風鈴お姫」と呼ばれる売れっ子になった。清玄は殺されて亡霊になっても桜姫を追う。頭が混乱して、もうついていけない南北の世界がある。



彫り物をした皮膚の剥製 『彩色皮膚病圖譜』(土肥慶蔵・遠山郁三)

ともかく東大に皮膚を残した仕事師の背中に権助は見当たらないようである。桜姫の釣鐘も見えないが、桜が散るその図柄に、「桜に釣鐘」のいれずみとの縁が隠されてあるのが面白い。権助は手ぬぐいであっさり人を殺したあと、けろりとして、〽山寺のや、春の夕暮れ来て見れば と、謡の一節を口ずさんで去っていく場面がある。それは、『道成寺』を思い起こさせ、その原拠が、『新古今和歌集』の「山寺の春の夕暮れ来て見れば 入相の鐘に花の散るらん」にある(服部幸雄「歌舞伎の桜」)。僧である清玄と鐘、その「鐘と桜」のいれずみの釣鐘権助、権助の権は、「ゴーン助」であると郡司正勝が示唆したが、その釣鐘と桜を、権助との再会を願っていれずみした桜姫がいる。

この「桜姫東文章」は、戦前わずかに上演されたのみであったのを、三島由紀夫の監修で、戦後初めて昭和34年に歌舞伎座で上演、六代目歌右衛門が桜姫、初代白鸚(八代幸四郎)が清玄・権助を演じた。昭和42年3月、国立劇場で、「ゴーン助」の郡司正勝監督による上演のプログラムのために書かれた三島の文章(「南北の世界」、文献5より引用)がある。

「南北はコントラストの効果のためなら何でもやる。劇作家としての道徳は、ひたすら、人

間と世相から極端な反極を見つけ出し、それをむりやりに結び付けて、恐ろしい笑いを惹起することでしかない。登場人物はそれぞれ壊れている。手足もばらばらの木偶人形のように壊れている。というのは、一定の論理的な統一的な人格などというものを、彼が信じていないことから起こる。＜中略＞こんなに悪が自由とか野放しにされている世界にわれわれは生きることができない。だからこそ、それは舞台の上に生きるのだ。」

その三島もまたいれずみにこだわった男であった。件の剥製になった仕事師も、若かりしころ、その野放しの悪のかっこよさに憧れたのだろうか。時代を超えて、今、その背中は何も語らず、静かに東大の博物館に在るが、東大出の三島がそれを観たという気配はない。

(熊本保健科学大学・学長)

#### 主要文献

- 1) 飯沢 匡:「コレクター」,『飯沢 匡刺青小説集』,1972.
- 2) 小野友道:「いれずみ物語—三島由紀夫のいれずみ」大塚葉報,2006.
- 3) 高木彬光:『刺青殺人事件』角川文庫,1973.『羽衣の女』角川文庫,1978.
- 4) 土肥慶蔵,遠山郁三:『彩色皮膚病圖譜』下巻南山堂書店,1931.
- 5) <http://www5b.biglobe.ne.jp/~kabusk/sakuhin86.htm> ;三島由紀夫と「桜姫東文章」,『桜姫断章』.
- 6) 服部幸雄:歌舞伎の桜,國文学 46;116,2001.